

次 第

1. 開 会

2. 主催者挨拶 公益財団法人鍋島報效会 理事長 鍋島 直晶

3. 報告者・助言者紹介

4. 報 告(各 30 分)

(1) 在シベリアポーランド人孤児の救助、ならびに、第一次世界大戦時の
ベルギーへの人道的支援に携わった鍋島榮子侯爵夫人

…………… 野村 憲一 p. 2

(2) 肥前国佐賀藩第 11 代藩主鍋島直大夫人栄子の中国女性との交流活動
—東洋婦人会を手掛かりとして— …………… 薛 梅 p. 7

5. 講評・助言

公益財団法人鍋島報效会 理事

高島 忠平

藩政史研究家

大園 隆二郎

6. 閉 会

在シベリアポーランド人孤児の救助、ならびに、 第一次世界大戦時のベルギーへの人道的支援に 携わった鍋島榮子侯爵夫人

野村 憲一（さいがた医療センター 内科系診療部長）

要旨

旧肥前佐賀第 11 代藩主鍋島直大侯爵の夫人、鍋島榮子は明治から大正にかけて活躍した人である。日本赤十字社篤志看護婦人会会長、婦人共立育児会の会頭、大日本女学会副総裁、愛国婦人会理事などを務めた。彼女の生涯を通じた人道的貢献は有名ではあるが、その詳細についてははっきりしていないことも多い。筆者は、鍋島榮子の人道的貢献について、研究を開始した当初は、「在シベリアポーランド人孤児の救助」、ならびに、「第一次世界大戦時のベルギーへの人道的支援」を中心に彼女の活動を検討したが、研究を進めるうちに、実は、戦災被害者に対する榮子の人道的支援は、プロシア、イギリス、セルビア、ベルギー、ルーマニア、ポーランドにまで及んでいたことを発見した。

榮子は、プロシア王国からは赤十字第三記章、グレートブリテンおよびアイルランド連合王国からはデーム・コムマンダー・オブ・ゼ・ブリティッシュ・エムパイア二等婦人勲章、セルビア王国からは聖サヴァ勲章、ベルギー王国からはメダイド・ラレーヌ・エリベット記章、ルーマニア王国からレジナマリア勲章を授与されている。各々の章の授与の理由は以下の通り。プロシアからののは、日本赤十字社によるロシア人に対する人道的貢献が、ブリテンからののは国際的な看護師派遣が、セルビアとベルギーからののは戦災に対する多額の寄付が理由と推測される。また、榮子はシベリアのポーランド人孤児の慰問も行っている。当時、ポーランド語、英語、日本語の 3 言語で書かれた雑誌に、榮子の顔写真が掲載されており、実際に榮子が慰問したことが書かれていたのである。これらの事実から、榮子は世界中で評価されていたことがわかる。

本稿では、「在シベリアポーランド人孤児の救助」、ならびに、「第一次世界大戦時のベルギーへの人道的支援」だけではなく、戦災で苦しむ人のために、生涯努力しつづけた鍋島榮子の業績を紹介したい。

はじめに

鍋島榮子は、第 11 代肥前佐賀藩主鍋島直大侯爵の夫人である。明治 20 年（1887 年）に日本赤十字社篤志看護婦人会会長に就任、以後、日清、日露両戦争で負傷兵の看護に当たり、さらに、各地の病院を慰問するなど社会事業活動を行った。

この、榮子が会長を務めた日本赤十字社篤志看護婦人会が日本の歴史に与えたインパクトは大きい。例えば、当時、病人の包帯を作成するといった業務は下賤な仕事と考えられていたが¹⁾、榮子のような貴婦人が率先してこのような看護業務を行うことで、看護婦という職業に対する市民の大きな意識改革が行われたということが挙げられる。篤志看護婦人会というのは、近代日本で女性の社会進出を推し進めた団体の一つであったのである。

榮子は、国内はもちろん、海外からの評価も高かった。数々の外国勲章を授与されていることがそれを裏付けている。本稿では、これらの業績について時系列で紹介したい。

1) 普魯西（プロシア）王国より赤十字第三等記章を受章（明治40年(1907年)11月14日）

明治40年、榮子はプロシア王国から赤十字第三等記章を受章している²⁾。史料には授賞理由は書いていないが、おそらく、榮子は日本赤十字篤志看護婦の代表として授けられたのであろう。日露戦争が始まった時、欧米諸国は中立を保ちながらも、日本に同情的な動きを見せた。プロシアの赤十字社は慈善的援助を行うなど、協力的な態度を示している。ドイツ皇帝も横浜、膠州の病院の使用を認めていた。

戦争開始後、多くのロシア人捕虜が出た。日本は、捕虜に関する国際的な規定（明治32年(1899年)に発効された「陸戦の法規慣例に関する条約」(ハーグ陸戦条約)）に従って、日本人だけではなくロシア人の捕虜に対しても、手厚く看護した。このように日本の救護看護は世界的に賞賛されたことから、代表として、榮子が記章を受けたことが示唆される。

2) 大不列顛（ブリテン）国より、デューム・コムマンダー・オブ・ゼ・ブリティシエ・エムパイア二等婦人勲章を受章（大正7年(1918年)6月24日）

大英帝国の勲章 “Dame commander of the British empire” のこと³⁾。授賞理由は「戦役に尽力セシニ依リ」である¹⁾。日本赤十字社が第一次世界大戦中に、グレートブリテンおよびアイルランド連合王国に看護婦を派遣したことを指す。

日本政府は、グレートブリテンおよびアイルランド連合王国、フランス共和国、ロシア帝国の3国から救護派遣の依頼を受け、日本赤十字社の看護婦を各国に派遣した⁴⁾。グレートブリテンおよびアイルランド連合王国への派遣隊は、大正4年(1915年)1月22日、ロンドンに到着。ネトリー赤十字病院で勤務した。大正4年(1915年)12月31日に勤務は終了。その働きぶりには惜しみない賞賛が贈られたという⁵⁾。

3) 塞耳比亜（セルビア）王国より聖サヴァ勲章授賞（大正7年(1918年)10月29日）

第一次世界大戦の開戦後すぐ、大正4年(1915年)に、榮子は、ロシア帝国皇后および皇太后付女官のエヴゲニヤ・マレフスカヤ=マレヴィチ、セルビア人の東京外国語学校ロシア語教師ドゥシャン・トドロヴィチとその妻でピアニストのカテリーナ・トドロヴィチ⁶⁾らとともに「塞国救難(済)会」を結成し、その会長に就任。史料には『塞国救済会設立ニ際シテハ賛助トナリテ尽力且ツ同国窮状ニ対シ義捐金ヲ募リ金品ヲ贈呈シ』とあり、この多額の寄付が認められて、セルビア王国政府から聖サヴァ三等勲章を授与されたと考えられる^{1,7)}。

4) 白耳義（ベルギー）王国より「メダイ・ド・ラレーヌ・エリベット」記章を受章（大正8年(1919年)11月3日）

これはエリザベス女王記章（オランダ語：Koningin Elisabeth Medaille、フランス語：Médaille de la reine Élisabeth）と考えられる。戦争の犠牲者のために活動した人に授与されている。榮子の受章理由は「戦災救護」となっている⁷⁾。実は、榮子は戦禍を被ったベルギーに多額の寄付をしていたのであった。これが彼女の授賞理由であろう。

大正3年(1914年)に勃発した第一次世界大戦でベルギー王国はドイツ帝国の侵攻を受けるも、徹底抗戦に出た。この戦いが報じられると、大日本帝国におけるベルギー王国への関心は急速に高まった。そのような中、「日本婦人白国同情会」の会長である榮子は、人形展覧会を開き、そこで、山脇高等女学校の女子生徒たちによる手作りの人形を販売し、そのお金でベルギー王国を支援しようとした。この展覧会では28日間で4000円以上の売り上げがあったという⁸⁾。当時の新聞記事には、このイベントでは、榮子以下、たくさんの貴婦人が「多忙気に会務に立ち働いてお

られました」と書かれており、実際に榮子をはじめ、たくさんの人たちが汗を流して労働をしていたことが分かる。最終的には、この時のお金だけでなく、さらに様々な手法で集めた合計5万円を榮子はベルギー王国に贈呈していた⁹⁾。

さて、これで、受章理由は判明したが、では、なぜ榮子は「白国同情会」を率いていたのであろうか？この理由が書かれた史料はまだ見つかっていないが、夫の鍋島直大が「在邦白耳義協会」の会長であったことは理由の一つであろう¹⁰⁾。

5) ルーマニア王国よりレジナマリア勲章 (大正9年(1920年)10月12日)

榮子はルーマニア王国の勲章(レジナマリア章)を受章している¹¹⁾。おそらくCrucea Regina Maria 勲章のことであろう。では、榮子は、どのような理由でこの章を受章したのであろうか。また、ルーマニア王国は日本赤十字社とどんな関係があったのであろうか？

考えられる事案は二つある。一つは、第一次世界大戦の青島の日独戦の際、捕虜となった人々は、日本各地の施設に収容されていた。この捕虜たちの世話を日本赤十字社が行っている。この捕虜となった人たちの中にルーマニア人がいたという事実がある。この人たちが、ルーマニアに帰国したのち、日本赤十字社に世話になった事実を政府に話し、このことでルーマニア政府が動いた可能性がある。

もう一つは、シベリア出兵時、大日本帝国軍とルーマニア軍に接触があったという事実である。シベリア出兵に従軍した鈴木壯六の日記¹²⁾に、『六月二十二日晴 午後四時、ルーマニア赤十字社員来訪。俘虜収容に関する願談をなせり。』(太字、下線は筆者)という記載がある。ルーマニア赤十字は、シベリアで日本と接触していたのである。

榮子たちをはじめとした日本赤十字の関係者がルーマニア王国の賞を授賞した理由は、このうちのどちらか、それとも両方であるかはまだ不明である。シベリア出兵の方であろうと筆者は考えているが、現時点で確証はない。今後、さらに調査を進めたい。

6) シベリアから日本に来たポーランド人孤児を慰問 (大正11年(1922年))

シベリアから日本に逃れてきたポーランド人孤児を慰問したということが、日本での勲章受章の理由の一つに挙げられている¹⁾。このポーランド人孤児救済とはどのようなことであったのであろうか。

大正時代、シベリアにいたポーランド孤児を大日本帝国が救出した件についてまとめてみると、以下のようになる¹³⁾。

大正8年(1919年)、ロシア国内は革命勃発によって、内戦状態となった。この時、極寒の地、極東シベリアには、遠く離れた西のポーランドの地から、政治犯やポーランド愛国者が流刑によって送られてきていた。彼らは、重労働に加え、食糧不足のため、極限の生活を送っており、なかでも孤児たちは、もう、死を待つしかないという状態であった。

そんな中、この孤児たちだけでも救済しようと、「ポーランド孤児救済委員会」がアンナ・ビルケウイッチ



女史によりウラジオストクで設立され、この会が日本に救援を求めてきた。日本赤十字社は、わずか17日後に救済に協力することを決定する。

大正9年(1920年)7月、大日本帝国陸軍は、ウラジオストクで孤児たちを輸送船に乗せ、福井県敦賀まで護送した。この子ども達は東京の福田会育児所に収容された。福田会では、赤十字社をはじめ、多数の人たちからの慰問があり、子どもたちは大変喜んだという。これらの児童たちは、しばらく日本に滞在し、体調を整えた後、本国にまで無事に送り返された。

上述のビルケウィッチ女史は、日本とポーランドの相互理解の促進を狙い、ECHO DALEKIEGO WSCHODU(日本語の題は「極東の叫び」という雑誌を日本で創刊、刊行していた¹⁴⁾。その第10号(大正11年5月1日発刊)「日本赤十字記念號」に榮子がシベリア孤児慰問に訪れたという記載がある。「・・・鍋島侯爵夫人、本野子爵夫人始め、多くの貴婦人は、収容所を訪れ様々なる慰問品を贈られた。こんな場合には児童等は、二列に並んで福田会の応接間に入り、波蘭国家や其他の唱歌を合唱した。その後貴婦人方は自ら慰問品を分配せられた。児童等は与えられた笛やラッパなどを手にし、喜び勇んで後庭に飛び出し、各々それを吹き始めた。貴婦人方は此無邪気な有様を同情に満ちた眼で眺め、自らも大いに喜んで居られた。・・・」と書かれており、榮子の写真も載せられていた(図)。これにより、榮子がポーランド孤児たちの救助に携わり、賞賛を受けた事実が確認できた。

おわりに

今回、筆者は、鍋島榮子の世界規模の活躍について詳述した。日本史上、これほどまで、広く海外に人道支援を行った人は、なかなかいないのではないだろうか。もちろん、榮子の評価の一つは多額の寄付であり、それは鍋島藩の財力によるものである。しかしながら、個々の事例の詳細を調べていくと、榮子は「侯爵夫人」という華族の立場にありながら、他の人と分け隔てなく、同じように汗を流して働いていたことが分かる。包帯を編んだりもしていたのである。この点が「女性活動家の草分け」と呼ばれるにふさわしいと筆者は思う。また、榮子の支援は戦災に対するものが多いことにも気づかされる。榮子は、戦争を憎み、その被害者たちの力になりたかったのであろう。

さて、明治時代、日本人女性は飛躍的な社会進出を果たした。その手段として、選択された職業の一つが看護婦である。榮子が率いていた篤志看護婦人会は海外にまで影響を及ぼしていた。例えば、日本での看護婦の活躍ぶりに注目した人物に、清国の女性留学生であった秋瑾がいる。彼女は、実践女学校で学び、清国に戻ってから、女性の解放、清朝打倒のための革命を目指して活動を開始した。秋瑾は、中国女性の自立手段の一つとして、看護婦になるのがよいと考え、日本語の看護の教科書を翻訳し、彼女が発行人となった女性啓蒙雑誌『中国女報』に掲載した。日本で始まった「女性が救護看護婦になって社会で働く」という運動は、清国へ飛び火し、アジアでの女性解放の魁になったことは事実である。鍋島榮子は、期せずして、歴史の大きな方向性を決定していたのであった。

以上、本稿では、国際的な活動を行った鍋島榮子を紹介した。県民の皆様にはぜひとも彼女を誇りに思っていたきたいし、子どもたちには「将来なりたい人」として、彼女の名前を挙げてもらいたいと願う次第である。

参考文献

- 1) 防衛省防衛研究所、レファレンスコード C05034043200。
- 2) 国立公文書館、レファレンスコード A10112639900。
- 3) 外務省外交史料館、レファレンスコード B18010164000。
- 4) 『日本赤十字社史続稿：明治四十一至大正十一年。下巻』日本赤十字社編 昭和4年。
- 5) 澤村修治：『日本のナイチンゲール—従軍看護婦の近代史』、図書新聞、2013、p139-142。
- 6) 柴宜弘：『中欧研究』第4号、2018年、16-22頁。
- 7) 国立公文書館、レファレンスコード A10112882000。
- 8) [よみうり婦人付録] 売上四五千円 人形展覧会終わる、読売新聞、3月1日、1915。(読売新聞社には引用について許諾済み)
- 9) [よみうり婦人付録] 五万円をベルギー公使へ 鍋島邸のベルギー同情報告会、読売新聞、7月13日、1915。(読売新聞社には引用について許諾済み)
- 10) 外務省外交史料館、レファレンスコード B03041013600。
- 11) 国立公文書館、レファレンスコード A10112910600。
- 12) 黒川智子、松田忍：学苑、923、1-42、2017。
- 13) 野村憲一：看護実践の科学、43(6)、61-69、2018。
- 14) アンナ・ビルケウィッチ：ECHO DALEKIEGO WSCHODU (邦題「極東の叫び」) 第10号、大正11年5月、ジャパントイムス社。

肥前国佐賀藩第 11 代藩主鍋島直大夫人栄子の 中国女性との交流活動 —東洋婦人会を手掛かりとして— 薛 梅（名古屋大学大学院博士後期課程修了）

はじめに

- ・鍋島栄子(1855～1941)について
- ・栄子の中国女性との交流活動の先行研究

一 東洋婦人会創立に至るまでの経緯（1900 年頃～日露戦争）

1 背景—東西両洋＝黄白人種の競争をめぐる議論—

- ・近衛篤磨の「同人種同盟」論
- ・大隈重信の「支那保全」論

2 栄子の東洋女性への関心

栄子は社交の才能に優れ、夫直大がイタリア全権公使に在任中において外交官夫人としてイタリア社交界ですでに頭角を現していた。1882年に夫に伴って帰国、その後直大が鹿鳴館舞踏練習会幹事長になると鹿鳴館を舞台とする上流階層婦人の社交界において活躍する。1887年、鹿鳴館の幕は下りたが、それを舞台としていた栄子の社交活動は終らなかった。それまでの西洋一点張りの外国人招待の姿勢に対し、栄子は目も気も配っていなかった「支那朝鮮」たる東洋の国々に目を向けるようになった。その象徴的な出来事は彼女が長らく会長職を務めた、「東洋」の名を冠した女性団体、東洋婦人会の創立である。

3 潘雪箴と清藤秋子

- ・横浜大同学校女性教師潘雪箴について
- ・社会活動家清藤秋子について



- ・潘雪箴の演説 1901年9月30日に帝国婦人協会
同11月24日に大日本婦人教育会
1902年1月13日に「貴婦人交際会」（鍋島邸で）

4 東洋婦人会の創立

1903年春、日本の上流階層女性を中心とする東洋婦人会が創立された。

- ・主旨「東洋各国より来遊する学生并に観光者に対し諸種の利便を図ると共に東洋婦人間の交誼を敦うせんとする」→その裏には

- ・人事について→栄子が東洋婦人会指導層に入らなかった理由

二 拡張期（日露戦争～辛亥革命期）

1904年5月、鍋島栄子は二代目会長に推薦され、初代会長松平久子が理事に退く。6月に華族会館で発会式に代えて懇親会を開き、栄子を中心とする東洋婦人会は新たに出発した。

1 日本における交流活動

1.1 在横浜・神戸の中国女性との交流

1904年8月、栄子会長の囑託を受けて清藤は横浜、神戸へ在留の中国有志者に向けての遊説に赴いた。10月、日清両国の懇親会を兼ねて孔子祭が行われ、在横浜の中国女性は東洋婦人会の顧問、理事等を招待した。その一ヶ月後東洋婦人会第一年会が盛大に開かれた。

1.2 清国外交官夫人たちとの交流

東洋婦人会は屢々在日の外交官夫人らを招いて招待会を開いた。こうした招待会は東洋婦人会が作った日中両国の上流階層女性の社交場である（図1）。



図1 東洋婦人会創立三周年記念会(1907年) 栄子会長は洋装で一列目の中央

(出典：『清国雑観』大日本東洋婦人会出版、1908年)

1.3 訪日の清国皇族との交流

1906年1月に清国皇族の載澤が

訪日した際、東洋婦人会は招待会を開いた。載澤は鍋島栄子会長の社交振りを高く称賛し、中国女性開導の任を同会に囑託し引換に二百円の寄付金を納め、鍋島侯爵夫妻の清国訪問も快諾した。1907年12月、東伏見宮の訪問の答礼として皇族溥倫が日本に来た際、東洋婦人会は鍋島栄子会長の邸で招待会を開き、溥倫から同会へ二百円の賛助を受け、同妃を東洋婦人会名誉会員とすることも決定された。

2 中国における交流活動—北京日本婦人会を介して—

清末の東洋婦人会の中国における交流活動は北京日本婦人会を通して行われた。北京日本婦人会の主要メンバーとしての内田政子と服部繁子が1900年初頭に清国に渡って、東洋婦人会と北京貴婦人界との交流の道を切り開き、日中両国の上流階層の女性交流の先兵的役割を果たしていた。

2.1 清藤秋子・河原虎子の清国視察(1905年8～12月)

1905年8月栄子会長は清藤秋子・河原虎子を清国に派遣した。北京で清藤と河原は、服部繁子をはじめとする日本婦人会メンバーの斡旋によって中国女子教育の状況を視察することができたほか、清国の女性皇・貴族、大官夫人をはじめとする北京貴婦人界の重鎮と成功裏に「交際」することもできた。二人の活動を通して東洋婦人会は北京貴婦人界の支持を得ており、女子教育や支部創設などの今後の中国における事業活動の段取りをつけていた。

2.2 「清国派遣女教員養成所」の設立(1906年5月)

1906年5月、東洋婦人会の附属事業として清国派遣女教員養成所が開設された。同所は卒業生を送り出すと同時に、日本における中国人女子留学生の世話をした。1909年5月時点までに計

17名の卒業生を送り出しており、そのうちの14名は金州、北京、保定、南京、武昌、福州、安徽省、四川省、山東省等の清国各地の女学堂、または家庭に教師として派遣された。1909年11月頃、清国派遣女教員養成所は「東洋女塾」に改名されたが、派遣事業は続いていた。

2.3 鍋島栄子会長の渡清（1908年9月～12月）

早くも1906年には、東洋婦人会主催の招待会で訪日中の清国大使・載澤は鍋島夫妻の清国訪問を快諾していた。2年後、いよいよ鍋島夫妻の渡清の計画を実行することになった。栄子は東洋婦人会会長、鍋島直大は東亜同文会会長の資格をもって中国各地を視察しその地の要人と会見する鍋島夫婦の渡清計画が実施された。北京では服部繁子と伊集院公使夫人の斡旋により、栄子は清国の各皇族妃や政府要人那桐の夫人と面会した。また西太后への拝謁も求めたが、西太后が急死したために実現しなかった。西太后への謁見は叶わなかったが当時三歳の溥儀と初めて対面することができた。このように中国の上流階層の女性と交流した以外にも、栄子は北京の女学校の見学もしていた。上海では上海日本婦人会や上海東洋婦人会との交流があって、寄附金も出していた。

三 一時的低迷と再興(辛亥革命期～満洲事変前)

1 一時的低迷(辛亥革命期～1915年7月)

辛亥革命は中国の社会秩序を乱し旧来の政治を揺らがしたため、東洋婦人会の事業活動に打撃を与えた。1912年頃から1915年まで東洋婦人会は女子留学生の世話以外の事業を中止し、ほぼ一時休会状態に入っていた。

2 東洋婦人会の再興―「日支親善」を掲げて―

辛亥革命後、孫文の代わりに袁世凱が中華民国大總統に就任し、北京政府(北洋軍閥の支配により北洋政府ともいう)の実権を握った。



1915年5月には袁世凱が対華二十一条を受け入れたため中国人の排日感情が激化した。そのように日中関係の緊張が高まるなかで、1915年7月、東洋婦人会は久々に再開された(図2)。再開後には在日の外交官と夫人連を主な対象とする招待活動が率先して行われた。同10月、鍋島侯邸で東洋婦人会は「日支親睦」を図る茶話会を開いた。

図2 1915年に東洋婦人会が久々に再開した(鍋島侯爵の右側は栄子会長)(出典:口絵「東洋婦人会」『婦人画報』(111)、1915年8月)

2.1 北洋政府外交官夫人への招待活動—陳彦安を中心に—

再開後には在日の外交官と夫人連を主な対象とする招待活動が率先して行われた。その対象はまずは1916年に新たに駐日公使に任命された章宗祥(1879～1962)の夫人陳彦安であった。陳彦安と東洋婦人会の縁は深かった。1903年12月に陳は留学生として東洋婦人会に招待された。翌3月に行われた実践女学校の中国女子留學生の卒業式に栄子会長をはじめ東洋婦人会の指導層が列席して、陳彦安の卒業答辞を聞いていた。13年ぶりに再び来日した際に陳は、東洋婦人会に入会した。1917年12月、陳は栄子会長を含む東洋婦人会メンバーおよび政界要人らを公使館に招いて入会祝いとしての茶話会を開いた(図3)。また、陳は国民党の重鎮唐紹儀の夫人と共に「東洋婦人会」主催の晩餐会に出席したこともある。



図3 陳彦安は東洋婦人会の会員を公使館に招待した光景 (前列左より犬養毅、鍋島侯爵、比志島中将夫人、棚橋絢子、栄子会長、陳彦安) (出典：口絵『婦人画報』1918年1月)

2.2 中国女子教育への支援活動の継続

東洋婦人会の派遣女性教員事業は辛亥革命期に一時中止されたが、やがて再開された。女子留學生の受け入れについては、ほぼ一時休会中であつたと思われる1913年にも中華民国政府の依頼で東洋婦人会は45名の女子留學生の宿舍提供・教育の事業を実行しており、そのような事業は1921年まで続けられていたが、資金不足のため中止せざるを得なくなった。1923年3月に外務省文化事業部主導の「対支文化事業」が発足すると、鍋島会長は「東洋婦人会事業補助申請」を作成し、翌月に当該事業の補助金を申請していたが、ところが申請は通らず、「対支文化事業」の補助の対象から除外された。

四 全面的プロパガンダ期(満洲事変～日中戦争前)

「満洲国」成立後、東洋婦人会は「日支親善」を日・「満」・「支」親善と改め、その活動に「満洲国」関係の事業を加えた。日・「満」・「支」親善のなかで「日満親善」に関する事業活動は中心である。1933年から1935年までは、栄子会長が病気で静養していた。そのため、会務全般は清藤秋子理事が司っていた。後、栄子は一時的に復帰したが、病気が再発したため、四女の松平信子が会長の座を継いだ。

五 日中戦中の東洋婦人会とその終焉

1937年7月の盧溝橋事件を皮切りに、日中全面戦争が勃発した。翌5月、文部大臣の認可書を得たうえで東洋婦人会はその役員の大部分が重なっている大日本婦人教育会と合併し東洋婦人教育会となった。栄子は82歳の高齢で顧問を務め、次女の梨本宮守正王妃伊都子が総裁、四女の元東洋婦人会会長の松平信子が会長を務めたほか、清藤秋子、服部繁子をはじめとする東洋婦人会の元幹部たちはそのまま東洋婦人教育会の指導職に留任し銃後の平和工作を展開した。同会の活動は終戦まで続いていたが、帝国主義侵略戦争の失敗に伴い歴史から姿を消した。

主要参考文献

著書類

芳賀登(他)監修『日本女性人名辞典』、臼井勝美ほか(編)『日本近現代人名辞典』、楠戸義昭・岩尾光代『維新の女 続』、小田部雄次『華族家の女性たち』、馬場毅(編)『近代日中関係史の中のアジア主義：東亜同文会・東亜同文書院を中心に』、広部泉『人種戦争という寓話—黄禍論とアジア主義』、古屋哲夫(編)『近代日本のアジア認識』、故下田校長先生伝記編纂所(編)『下田歌子先生伝』、周一川『中国人女性の日本留学史研究』、小林道彦ほか(編)『内田康哉関係資料集成』(第1・2巻)、山根幸夫『東方文化事業の歴史—昭和前期における日中文化交流—』

論文類

孫長亮「清季日本女性教習拾遺」(『近代中国婦女史研究』(29)、中央研究院近代史研究所、2017)、中野礼四郎「鍋島直大公略伝(九)」(『肥前協会』11(12)、1941)と「鍋島直大公略伝(十)」(『肥前協会』12(10))、佐藤尚子「明治婦人界と中国女子教育」(『教育科学』(24)、2001)、加藤恭子「二〇世紀初頭における中国への日本の女子教員派遣と「東洋婦人会」：中国の女子学校教育の実施にむけた協力活動について」(『お茶の水史学』(57)、2013)、董秋艶「草創期東洋婦人会に関する研究」(『九州大学教育基礎学研究』(7)、2009)と「近代女子教育の成立をめぐる日中関係史研究」(九州大学博士論文甲第12281号、2015)、阿部洋「戦前日本の「対支文化事業」と中国人留学生—学費補給問題を中心に—」(『国立教育研究所紀要』(121)、1992)と「「対支文化事業」の成立過程」(『日本の教育史学：教育史学会紀要』(21)、1978)、
*典拠等に関する注は今回、紙数の関係で省略。報告書に記載。

